二　教壇記録

第一次指導（一時間目）

児童始業二分前に教室にはいる。
師、子どもたちの前に進まれ、

「ブレーメンのがくたい」のところを開いておいて下さい。

子どもたち、本を開き、鉛筆をノートにはさんで用意する。

用意ができたら、こう、手をおろしておきましょう。そうすると、とっても姿勢がよくなるでしょう。そして、気持がいいでしょう。

子どもたちの学習姿勢が見事に整然となる。始業合図のブザーが鳴る。師、静かに御登壇。

さあ、始めましょうね。

ゆっくり、丁寧におじぎされる。一同礼をする。静けさの中に、学習の気みなぎる。

今日と明日、「ブレーメンのがくたい」のところをやります。おうちで読んでみたでしょう。読んでみた人、手を挙げて下さい。

一斉に挙手する

はい。手をおろして下さい。よかったね。みんな読みましたね、さ、ここのところを読んでみて、とっても面白いと読んだ人あるかな。面白かった人、手を挙げて下さい。

三分の二ほど挙手

よし、あまり面白くなかった人、手を挙げて下さい。

五分の一ほど挙手

はい。手をおろしなさい。さあ、面白くないと読んだ人も、二時間お勉強すると、とっても面白くなりますよ。みなさんの本には、❶から❹まで番号がついていましたね。今日はそれをやめます。そして、先生が番号をつけてあげるから、それでお勉強して下さい。

一番はじめに「ブレーメンのがくたい」というのが書いてあって、その次、少し小さな字で、書いているところがありますね。それをやめます。それをとります。だから、「ブレーメンのがくたい」の次に、「村のおひゃく

始業前の準備

・児童の自覚を促す。
（感覚的な面からも）
・日直の号令に合わせての挨拶は形式に流れやすい。

◎読んでみた人と問う。
（自己判断力をつける）
（児童の実態の把握）
・読後感を問い、興味の喚起、期待感を抱かせる。

第一次指導

〈区画〉（一よむ の指示にもなる）
指導の方向を決める大事なところなので、教師が決める。

・この教材は、自分達で劇を作るようになっているが、この話の面白さを味合わせることに絞っている。

・区画の工夫・意図は、四かくで書き出してみると分かる。

・児童が書き出しやすいように書かれた言葉で話が一掴みしやすいように、二とくの手引きと関連付けて区画することになる。

しょうの家の前で」と読んで下さい。だから、その上に1と書いて下さい。ちょっと待ちなさい。みなさんの本の上には、こういう線が書いてあるでしょう。

黒板の上の方に長く直線を引き、文章全体を象徴的に表現する。

そして、その下に❶と書いているけれども、線の上に1と書いて下さい。

直線の上に1と書いて見本を示す。

こういうふうに書いて下さいよ。

その次、こんどは六八頁に進みます。前から二行目「なんということだ」の上に2と書きなさい。その次は、同じ頁のおしまいから二行目「わたしも人間たちに」というところがあるでしょう。その上が3です。さ、こんどはその次の頁に❷と書いていますが、それをやめて、その上に4と書きなさい。さ、その次、こんどは七〇頁にいって、〇の中に3と書いているところがありますね。その番号をやめて、その上に5と書いて下さい。その次は、七一頁おしまいから五行目、「どろぼうたちをびっくりさせてやろう」というところがありましょう。その上に6と書いて下さい。その次、こんどは開いて、七二頁、〇の中に4と書いているところがありますね。それをやめて7と書きなさい。

これで七つに切りましたよ。さ、鉛筆は、またノートにはさんでおきなさい。

それでは七人に読んでもらいます。読む順番決まっているか。

〇　はい

誰からなの？

〇　はい（女の子、挙手）

あなたから。あなたが1、次は？　2はあなた。3はあなた。

次々と、順番を確認させられる。

大きい声で、ゆっくり読んで下さいね。そして、聞く人は、しっかり聞いて下さい。

一　よむ

順繰りに、女・男・女・男・女・男・女と七人がリレー式に立って音読する。

はい、本を置きなさい。とってもうまい読みだったね。聞く人もとっても一所懸命だったね。さ、手をおろして、

・番号の書き方も具体的に。

・鉛筆の仕舞い方も指示する。（落としたりしないように先手を打つ指示）

◎　読む順番を具体的に確認する。

◎「大きな声で、ゆっくり」読んでください。聞く人は、しっかり聞いてください」と指示は単純で明確に。（評価規準を細かくし過ぎると、教師の目は厳しいものとなり、教師も児童も苦しむことに……。）

一　よむ

◎　一よむの後では、指示したことをもとに努力を評価する。

・読んだ者には、その労をねぎらい聞いていた者の態度を認める気持ちで一言を。

・読んで聞くという授業から、考えることに重点が移るので、姿勢を整えさせる。ここでも、スタートを揃える意識で、集中力を高めさせる機会とする。

・「手を降ろしなさい」と具体的な行動で、姿勢を直すことを指示し、集中力を身に付ける訓練をしていると考えるとよい。

しっかり考えて下さいね。

二　とく

題目「ブレーメンのがくたい」と板書

ブレーメンのがくたいの話だが、「がくたい」というのは、ひとりでできるかな。ひとりでがくたいできるだろうか。なんでもないでしょう。あなたは。

○　ひとりではできません

出来ません。たくさんの人数が集まってやるのが楽隊でしょう。楽器もみんな同じ楽器で楽隊になるだろうか。ラッパだったら、みんなラッパ持っておったら、それで楽隊になるだろうか。あなたは。

○　みんなで、違う楽器を持たないと楽隊にならない

違う楽器でやらないと楽隊にならないね。たいこを持ったり、ふえを持ったり、ラッパを持ったり、違う楽器を持って、一緒にやらないと楽隊にならんでしょう。このブレーメンの楽隊は、何人で作ったの。何匹の楽隊かな。あなたは。

○　四人

四人楽隊だね。四匹とも何か楽器を持っておったかな？　特別なもの、さあ、一つバイオリンをやろうとか、ラッパをやろうとか言って、楽器を持っていたかな。あなたは。

○　持っていません

持っていません。何が楽器です。このブレーメンの楽隊の楽器は何？　あなたは。

○　声

声です。鳴き声が楽器です。ねこが、「ニャーゴ」とやるのが楽器。にわとりは、「コケコッコー」とやるのが楽器。さ、この四匹が楽隊をやろうということになって、一番先に、誰に聞かせたの。あなたは。

○　どろぼうです

どろぼうに聞かせました。どろぼうたちは、「いい音楽だなあ。うまいな、すばらしい音楽だなあ。」と聞いたか。あなたは。

○　あわてて逃げ出してしまいました

逃げだしてしまった。びっくりして逃げ出してしまった。みなさん音楽会に行ってね、音楽聞いて逃げだしたか？　「いい音楽だなあ。うまかったなあ。」と聞くでしょう。ところが、この四匹の楽隊をやったら、みな逃げ

二　とく

○　題目

・題名の板書から始める。（黙って見させる。この時間に児童の脳は、読んだことの整理を自動的に行っている。）（教師は、後ろ姿を見られていることを自覚すること。）

・題名の中の「がくたい」を糸口にしている。児童のもっている「楽隊」に対する認識を、この話の中で具体化していく。別な言い方をすると話の輪郭をはっきりさせるということである。

・この話の「楽隊」は、四人編成で、楽器は声であるということを、楽しい雰囲気の中で整理している。これを単純化・具体化というのである。問いの流れが自然である。

◎　ひびき

・この「楽隊」は、一番先に、誰に聞かせたかと、ユーモアのある問いを出している。

・「素晴らしい音楽だなあ。」と聞いたか、と問い、面白さを盛り上げている。そして、この話の特異性をはっきりさせる。

出してしまった。おかしい楽隊だ、こりゃ、こういうお話です。

今、七人の人が読んでくれたでしょう。

だから、こう切って番号をつけましょう。

前に書いた直線を七つに切って、その上に番号をつけられる。

誰のことを書いたか。1のところでは誰か。自分のことを話しておった者があったよ。何だったか。あなたは。

○　にわとりが自分のことを話していた

そう、にわとりでしたね。だからして、ここは、「にわとり」と書くのです。

板書、1へ「にわとり」

こういうふうに、一つずつ書くのですよ。わかったでしょう。短く書きなさいよ。ここはにわとりのことだから、「にわとり」と書く。その次は何のことだろう。そしてその次は何だろう。本をよく読んで、わかったら、それをノートに書きなさい。

三　よむ

一斉に黙読を始める。読みとっては、ノートに書いていく。実に、澄み切った教室の空気であり、気魄のこもった時間である。

四　かく

師は、机間を巡視して、丁寧にひとりひとりの学習を見てあるかれ、時々、黒板にもどっては、一段毎に板書していかれる。

これまでの板書は、次のようである。

ブレーメンの
がくたい

1　にわとり
2　犬
3　ねこ
4　ろば
5　どろぼうたち
6　四ひき
7　どろぼうたち

＊「みなさんは、音楽会に行って『いい音楽だな。』と聞くでしょう。ところが、この四匹の楽隊をやったら、皆逃げ出してしまった。おかしな楽隊だ。こりゃ、こういうお話です。」と、この話を整理している。最初の感想と呼応している。

○　手引き

・1のところでは、誰か、自分のことを話しておった者があったよ。

・具体的な手引きを出し、練習問題としてやり方を確認している。（子どもの身になってということはこういう扱いをすることである）

＊「にわとりが自分のことを話していた。」という児童の答を受けて、「にわとり」でしたねと、受け取り「にわとり」と板書する。そして、こういうふうに「短く」書くように指示する。短く書き出すと、六とくでの扱いがやりやすくなる。それは、文で書くと言葉の内容が規定されてしまい、それぞれ書き出した言葉を関連づけにくくなるからである。

三　よむ

四　かく

・教室の状況が書かれているので参考にしてほしい。